

# 若者ことばをフィールドワークする

瀬 沼 文 彰

## 序章 研究の目的と方法

### 1. 研究の動機と目的

私は1999年から3年間、吉本興業で芸人をしていて、仕事で舞台に立って漫才をしてきた。漫才とは2人の会話によって多くの人を笑わせなければならない。そのために当時から会話ということにはかなり興味を持っていた。

その当時から現在に至るまで、私は電車をはじめ、レストラン、喫茶店、多くの公共の場で他人の会話をよく聞いていた。それらは芸人のときはそこから面白い話を作るためであったが、現在は習慣のようになってしまっており、勝手に耳に入る。芸人の頃からそれらをすることで多くの若い世代に共通する会話の特徴が気になった。その特徴とは以下の通りである。また、その特徴を「態度にみる会話の特徴」と「言葉使いにみる会話の特徴」という2点に分けてみた。

#### 態度にみる会話の特徴

1. 聞き下手な態度
2. 笑いを意識した態度

#### 言葉づかいにみる会話の特徴

1. 人まねの会話
2. 会話・言葉の短縮化
3. あいまい語
4. 敬語を使えない会話

これらはもちろん私が感じたことであって、実際にこのような特徴があるのかどうかは定かではない。ここでは私の感じる若者の会話の特徴を明らかにするために、フィールドワークし、それが若い世代に特有の現代的な性格であるかどうかを検証したいと思う。

### 2. フィールドワークの方法

若者（高校生から大学生、16歳から25歳くらい、また見た目私服、または学校の制服を着ている人）を調査の対象とし、会話の特徴を調べるために、首都圏または近郊でテーブル

若者ことばをフィールドワークする

コーダーを用意し電車やレストラン、公共の場で録音、または録音が出来ない場合はメモ用紙に速記し、それらを文章化して実際に私の感じている特徴を使っているのか調査した。その中には電車に乗っている時に録音機で拾えた会話やファミリーレストランなどで若者の隣に座り、終始録音をしたものなどがある。

### 3. 仮説の設定

実際に改めてフィールドワークをして集めた事例は上にあげた6つの特徴に合うものが多かった。そこで、それをもとに次のような仮説を設定することにした。

態度にみる会話の特徴

#### 1. 聞き下手な態度

電車やファミリーレストランで耳にする会話でまず注目したのは、人の話を聞かずに自分の話したいことだけをやりとりするという会話の形態である。もちろん聞いているという姿勢は見かけるが、それに続く発言には、相手の言葉に対する反応や返答でないことが多い傾向がみられた。

#### 2. 笑いを意識した態度

日本人の笑いに関する文献は近年多く出版されている。それらによると、大阪ではかなりの人が笑いを意識して会話をしているという。しかし今回のフィールドワークからは東京でも多くの若者が笑いを意識していることに気づかされた。

笑いの質やレベルについてはもちろん大阪とは違うだろう。また、それがユーモアと言えるものかどうかも疑わしい。しかしボケやツッコミの意識を持ったやりとりを見かけることは少なくなかった。そこには冗談やギャグを会話に取り入れようとする意図があるように感じられた。

言葉使いにみる会話の特徴

#### 1. 人の真似の会話

流行語の中にはテレビなどのマスコミが発信源であるものが多い。しかし一方で女子高生などから広まった言葉も少なくない。そしていずれにしても一端、やはりはじめた言葉はあっという間に流行し、日常化する。そこには模倣という要素が非常に強いのではないかと思う。若者は自分の使える言葉をすぐに人から模倣して自分の言葉にする。だからどの会話を耳にしても、しゃべり方が極めて似たものになっている。

#### 2. 言葉の短縮化

若者の使う言葉には短縮語が多い。短縮する理由やその特徴はどのようなものなのだろうか。若い世代の会話は非常にテンポが早い、早口でしゃべる、言葉を短縮する、そして会話の内容が次から次へと変化していく。このような特徴はどのように説明できるのだろうか。

### 3. あいまい語

「……って感じ」, 「……とか」や「……じゃない?」のような語尾上げを若者が多く使い、自分の意見や考えをあいまいにし、それを相手に伝えようとしているのではないだろうか。直接、相手に意見を言うことは敬遠されるのが日本の文化であるが、それは若い世代がする、あいまいな会話と共通するのだろうか。

### 4. 敬語の使えない会話

敬語を話すのが苦手とする若者は多いが、最近、年上の人との会話のなかで「……です」ではなく「……っす」「……っすか?」という新語を敬語のように使う人が多い。それは友人同士と話す「タメ口」ではなく、敬語として使っていて、使われる年上の若者も許容していると感じる。

## 第1章 若者の会話の態度にみる特徴

### 1. 聞き下手な態度

聞き下手な人を説明するのにあたって、まったく聞く姿勢を持たない人と、聞いているようには見えるが実は聞いていない人とに分類した。前者は聞くという行為が感じられないことで、後者は会話の中で相手の話を聞いているようにみえるが、実際は自分のしゃべりたいことをひたすらしゃべることである。ここではそれを①聞かない態度、②自分主体の会話、という2点から考察した。

#### ① 聞かない態度

電車の中などで友人といるのにヘッドホンで音楽を聴いている高校生、大学生を目にすることがある。その学生たちに友人の話を聞く気はない。だからといってそこにいる2人が会話をしないのかというとヘッドホンをつけながら会話をするのである。しかし相手の話は聞く必要がないからヘッドホンで音楽を聴いているのではないだろうか。

また大学生の頃によくみかけたが、授業を聞いている学生は前にいる少数の学生で、真ん中より後ろの学生は携帯をいじっていたり、雑誌を読んでいたりと、隣の学生とひそひそとしゃべっている光景があった。後ろに座っている学生は聞く態度すら持っていない。だから先生が1人の学生に質問を投げかけても、必ずといってよいほど、「もう1度質問を言って下さい」という答えが出ていた。これらは話を聞いていないだけでなく聞く姿勢や態度すら持っていないといえる。

#### ② 自分主体の会話

自分主体の会話を説明するのに当たって、まずフィールドワークを参考にしたい。

2004年8月29日 立川 女の子2人が偶然に再会 メモで速記

若者ことばをフィールドワークする

A：○×子じゃない？

B：あーひさしぶりー

A：どうしてんの？最近？

B：△短大行って、今は休みだからこれから友達と……

A：っていうか私、一人暮らし始めたんだけど……だからバイトばっかで今日とか久々の休みなんだけど……

A：そういえばC君とは続いてるの？

B：うん

A：私なんかーD君にふられちゃってーまじーこの夏は1人って感じ……

B：（携帯電話の着信）あっごめん

A：あっ・・・じゃあねー

B：じゃあねー

このケースはAさんが質問をBさんに投げかけるが、Bさんの返答に対しては、何の反応もしていない。そして自分のことばかりを相手に伝えている。自分が発言したいために「っていうか」を使い無理やり自分の話に変えているのも特徴である。この会話ではAさんがBさんの言葉をほとんど聞いていないことは明らかである。「自分は……」「自分は……」「自分は……」という会話はこの場合だとAさんだけであるが、お互いに言い合っている会話も多い。以下ではそのケースの会話を示した。

2004年9月10日 夕食時に女性2人，大学生 録音

A：本当バンドとかやっていると、昼はバイトで夜は練習で大変って感じなんだよね

B：あたしなんかさー貯金とか全然できないよー

A：あたしも貯金しようと思って10万円貯まる貯金箱とか買っちゃってさー貯めてるんだけど

B：すごーい

A：全然貯まらないんだよね、さかさまにして、紙を使うと出せるんだよね（アクションをつけながら）（かなり本人も笑いながらしゃべっている）

B：（かなり大笑い）

A：お母さんもそれを見て「500円くらい私があげる」（少し声を変えてお母さんのまねをしながら）ってもらっちゃったりしてるよー

B：（かなりまだ笑いながら）あたしの家なんか全然くれないよー買い物、頼まれてもおつり30円でも返せって言われるし……

A：あたしは昼は家、ほとんどいないからさー

B：バイトかー

A：一人暮らし、早くしたいよー

B：1人暮らしするってあたしも親に言ったら、だめだって言うんだよーひどくない？

A：あたしの家は全然オッケーって感じだよ

一見、普通の会話のように感じるが聞いていたところ、あたし、あたしとお互いが言い合っているのが耳についた。お互い自分の話をしているだけで、かなり楽しんでいるように感じられた。途中で何度も大笑いする場面も多かった。このように「あたしは……」ではじまる会話には相手のひきついだものであっても、聞くという姿勢は感じにくい。

他にも、相手の話が終わったらすぐに、一言だけ「そうだね」や「うんうん」と軽いあいづちを打ち、すぐに自分の話や、自分の聞いて欲しいことばかり話す人もいる。ここでいう、あいづちは人の話を聞くためのものではなく、自分の話ををはじめるためのものである。だから人の話を聞くためのあいづちは、現在の若い世代の会話の中には見えにくいものになってしまったように思う。

2004年8月22日 南武線 録音機で女子高生2人の会話を記録 録音

A：今日、朝学校来るときに、家の近くに体育館があるじゃん？

B：うん

A：そこでなんか集会なのかなんだか分からないけど、高校生が100人くらい、いてーしかもみんな男の子でさーチョーきまざったよ……絶対に通らないといけない道じゃん？

B：そうなんだ・・

A：そうそう部活でさーSさんってT先輩と付き合ってたらしいよーなんかEがちょーかわいそうじゃない？でも——やっぱSさんってかわいいししょがないのかな……

ってか私的にはEがもっとがんばらなきゃいけないかったとおもうんだけど……どう思う？

B：あっ……そうだね……

A：Eはまだこのこと知らなくって一気づいたらやばいよね？

B：……

A：なんかSさんとうちら仲良くしてるから……なんか気まずいかなーって感じ

ここではAが圧倒的にしゃべり、Bはほとんど黙っていた。何度かあいづちを「うん」や「そうなんだー」とうってはいるが、Aの長いセリフの中で途中、あいづちを打つことはなかった。Aの同意を求める問いにだけ、返答をするが、それ以外、Bは黙って聞いていた。

この他のフィールドワークから得た会話からも若者は「うん」「それで」といった、人の話を聞いていることを表示するあいづちの信号は非常に少なかった。

## 2. 笑いを意識した態度

笑いを混ぜた会話では①笑わせること、と②笑われることの2つに分けて考察した。笑わ

若者ことばをフィールドワークする

せることは若者が相手を笑わせようとする意志を持っていることで、笑われるは、笑わせようと意図せずに笑いが発生することである。本来は恥ずかしいことであるが現在の若者は恥を笑いに変えている傾向があるように思う。それをここで説明する。

### ① 笑わせること

大阪人は「ボケ」、「ツッコミ」の役割を分担し、会話を弾ませている。大阪人はサービス精神が旺盛で、笑いの意識が高いとされているが、現在は東京でも、多くの若い世代が自分は漫才でいう「ボケ」、「ツッコミ」という役割を自覚し会話をしている。原因はテレビのバラエティー番組でのボケ、ツッコミという言葉が若者の間で日常化したからだろう。上で述べたが、若い世代は模倣が好きである。お笑い芸人は現在、女性に大変、人気がある。だから若者も面白いことを模倣することが東西にかかわらず、価値が置かれるのではないだろうか。

では、どのように相手を笑わせているのかというと、「ボケ担当」の人が少しずれたことを言うとツッコミ担当の人が「それはおかしい」と会話を修正するのである。もちろん本場の漫才と比べて他人が聞いてもまったく面白いことではないが、本人たちはそれがおもしろく、もしその修正がなければ「おい、ツッコミをしっかり入れてよー」と駄目だしのようなことを「ツッコミ担当者」にしている。ひとつフィールドワークで得られたものを紹介する。

2004年9月27日 焼肉屋 台風のせいで外は大雨であった 大学生男性2人 録音

A：(突然靴下を脱ぎ焼肉を焼く鉢で乾かし始めた)

B：(大笑いしながら) おいおい、靴下かよー

A：まじ非常事態だからよ、しっかりツッコミありがとう

B：靴下はないだろ (まだ笑い)

A：えっ……この後、パンツもいいかな

B：やりすぎだよ

隣で焼肉を食べおえた大学生2人の会話である。ツッコミを期待してのAの行為はBを笑わせるためにした行動であろう。しかもこの2人はこのお店でバイトをしているらしく、店員全員と知り合いで、多くのバイトの学生らしい男女がこの靴下を乾かす行為に対して、注意をするわけではなく笑っていた。隣でまだこれから食事をしようとしていた私からすると非常に不愉快ではあったが、Aは知り合いだけでなく、もっと多くの人を笑わせるためにやっていたように思われる。

「この後パンツもいいかな？」は漫才で言うボケ的な発言である。このセリフは違う店員が「何してるの？」というたびに3回、使われたが3人が3人とも「やりすぎ」のような発言を

していた。受け狙いのパフォーマンスに対するありふれたツッコミである。

## ② 笑われること

自分の失敗談を楽しく話すように最近なってきたのではないだろうか。失敗をすると若者は「おいしいー」を使う。おいしいとは本来、食べ物などで使うはずだが、最近では失敗すること、自分の他人より劣っている部分、負けることなどをひっくるめて「おいしいー」と表現する。そして見ていたものがそれを笑うのである。例をあげるなら「昨日、テストで赤点取っちゃって先生に呼び出しくらったよー」「おいしいーじゃん。みっちり怒られてこいよ」という感じである。そこには笑いがある。私が中学生の時代ならそれは恥ずかしいことでこっそりと職員室に向かうものであり、怒られたことを友人に話したりはしなかったが、現在、それは悲惨なおもしろい話に変わっている。恥を笑いに変えることが若い世代の中では定着してきているように会話を聞いていると感じた。

また女性の少しヌけたことを言う子や常識のない子のことを「天然ボケ」と言い、その子たちをからかって笑いに変えている光景もよく見る。それらは若者でいう「おいしいー」なのである。この天然ボケの女性は自分がドジなこと、つまり恥ずかしいことをしても、誰かが笑いに変えてくれるのである。そして笑われることを恥ずかしいとは感じずに面白いですませてしまう傾向がある。

## 第2章 言葉づかいにみる会話の特徴

### 1. 人まねの会話

言葉は赤ん坊がお母さんの真似をして覚えることに典型であるように、模倣によって獲得される。そして、成長するにしたがって、模倣する相手の範囲は広がり、かつ取捨選択する余地も増えることになる。しかし、若い世代には、しゃべり方や使う言葉に極めて似通ったことがある。しかもそれがあつという間に流行して、またすぐに使い捨てられる傾向がある。それをここでは①マス・メディアから流行した言葉と、②自然発生的に流行した言葉、という2点から考えてみた。

#### ① マス・メディアから流行した言葉

若者の多くはテレビで有名人が使っている言葉や友人が使っている言葉をすぐに真似して使う。上で書いた「おいしいー」は、最近のほとんどの若い世代が使用する言葉である。この「おいしいー」はバラエティー番組で芸人が痛い目にあったり、失敗した時に使われる言葉だったが現在は若者の日常語となっている。このケースのような発信源からは他に「すべる」(ギャグが受けない)や「さむい」(面白くないことを言ったときのフォローの時に使う)などが挙げられる。

2004年、芸人から流行した言葉は、お笑い芸人の長井秀和の「間違いない」(そこだけを

若者ことばをフィールドワークする

誇張して言う)やお笑い芸人のダンディー坂野の「ゲッツ！」(やったねの意)などである。芸能人からだけ若者語の流行は生まれるわけではなく、CMからも英会話のNOVAの「ビミュー」(あいまい語)は現在の若者が多用する言葉である。他にも、漫画『おいしんぼ』から「まったりする」(漫画での意味合いからはすこしずれて、のんびりするの意、漫画では、まったりした味という表現でこくのある味わいが口の中に広がるという意味)このように流行の発信源にはマス・メディアがあり、それを若者が模倣することで流行語が生まれる。しかし中にはすぐに捨てられてしまう言葉、例えば「チョコベリバ」(ちょーべりーバットでかなり気分が悪いという意味)で3年前に流行したが、現在ではほとんど使われず、死語となっている。若者の間では、大量の流行語が生まれるが、その分、大量の流行語が捨てられている。

## ② 自然発生的に流行した言葉

流行語の発信源は女子高生などから自然発生的に生まれることもある。例えば「オール」(徹夜をすること)や「告る」(好きな人に告白する)などはどこからともなく流行した言葉で、それをマスコミが取り上げることで広まった言葉もある。

自然発生ということで「しゃべり方」も若者が作り、マス・メディアが取り上げたものもある。それはギャル(髪を茶髪にして、肌を焼いている女子高生や女子大生)のしゃべり方は、かなり類似していて、まったく同じアクセント、同じ語尾をしている。「わたしーちょー今日、だるいんだけど……」そして相手は「まじでー」という感じである。文章では伝わりづらいと思うが本当にだるそうで、やる気のない同じしゃべり方をしているのが特徴である。またもう1つの特徴として、ギャルが男性の言葉を多用する傾向もあるといえる。人のことを「おまえ」や理解できないときには「わからなくねえ？」と尻上がりの発音、もう我慢できないときに「やってらんねー」などの言葉が使われている。

では男子高校生はというと、自分をえらそうにみせるようなしゃべり方、悪そうにみせるしゃべり方、きざなしゃべり方をしているようにも感じる。「……じゃあねえの?」「まじ次の授業かったるくねー」「うぜーんだけど」「おめーまじバカだな」など若者の中のある一定のグループはこのようなしゃべり方をしている者が多い。これらはマス・メディアから発生した言葉ではなく、若者の間で自然発生して、マス・メディアが取り上げることによって広まったことであり、上のマス・メディアの影響とは対称的なものもある。こちらの流行語やしゃべり方は身近な友達や知人の模倣という形式に当たる。

2004年8月17日 夏休みであったが制服を着た女子高生2人組み、髪を茶髪にし、ルーズソックスをはいた、見た目も完全にギャルといえる2人であった。 録音

A: この携帯、まじ電波わるいんだけどー(尻上がり)



B: A のふっるいもんーまじ買うべきだってー

A: Docomo にしようかなーとか思ってるんだけど, 番号変わるのうざくない

B: えっ……ってうか Docomo にしたら高いからあたしかけないよ

A: 冗談に決まってんじゃん。あたしにこれ以上バイトふやっせていう気?

B: だよな

A と B の会話はギャル語でありしゃべり方そのものは本当にそっくりであった。この文章で見る限り問題はないが、イントネーションや「うざい」など連発もするし「かなりー」と語尾を伸ばして使うところなど 2 人はそっくりであった。

## 2. 言葉の短縮化

日本にはたくさんの省略語がある。その多くは流行語同様、マス・メディアの影響であったり、若者が作り出して、マス・メディアが広めたものであったりする。ここでは短縮化について、①名詞、②形容詞、③文そのもの、という 3 点から考えてみた。

### ① 名詞の短縮化

名詞の短縮化の例として、コンビニをはじめにあげる。セブンイレブンは「セブン」または、「イレブン」、ファミリーマートは「ファミマ」などがある。また人の名前も木村拓哉をキムタク、お笑いコンビなどもナインティナインをナイナイ、場所なら裏原宿を裏原、ファッションもピアスはすべて「ヘそピ」「鼻ピ」、飲食店でもマクドナルドの「マック」大阪方面なら「マクド」をはじめミスタードーナツ「ミスド」牛井の吉野家は「よしぎゅう」などあらゆる日本語を若者が短縮している。そしてそれを日常語のように使っていることが特徴である。若者の間では、誰ひとり「マック?」「それどういう意味?」とはならず、あたりまえに出てくる省略語が数多くあるのである。

### ② 形容詞・動詞の短縮化

形容詞の短縮語では、独り言も短縮化される。大きいものを見たときに「大きいなー」ではなく「デカッ」や早かったときには「早っ」だけである。もちろん友人との会話の中での反応で「デカッ」や「長ッ」などを使うことも多くある。その他にも若者はたくさんの形容詞を短縮化している。例えば「きもい」(きもちわるい) や「ムズイ」(難しい)

動詞では「こくる」(好きな人に告白する)「オール」(朝まで徹夜する)などがあげられる。

### ③ 文の短縮化・省略化

文の短縮化はセブンイレブンに行くことを「セブンっちゃう」とか「コンビニっちゃう」などの短縮、ファミリーレストランでは、ガストに行くことを「ガスる」などという。

またフィールドワークによると単語の会話が非常に多い。学校の放課後「今日はどこ行

若者ことばをフィールドワークする

く?」「どこでもいいよ」「じゃあカラオケ」「いいよ」「どこの?」「駅前の」「誰と行く?」「〇子も誘う?」「いいよ」……ときっと1分もかからないだろう。

それから話題そのものが短い。例えばある一方の者がサッカーの話をしたとしたら、もう一方は自分の知っている知識だけを述べて、そこでサッカーの話は終わり、次は学校のレポートの話に移り変わり、友人の噂話、バイトの話と転々と内容が変わるのが特徴である。

省略化としては、主語、述語の欠落があげられる。主語か述語のどちらかが抜けていることは非常に多い。わたしの友人にも主語は毎回欠けていて、わたしはよく「何が?」や「誰が?」と聞き返すことが多い。電車でもしばしば若者が「何が?」や「誰が?」と聞き返していることを耳にすることがある。例をあげると「昨日A君とBさんが横浜に行こうと思ってたら、財布、落としちゃって行けなかったんだってー」とどちらが財布を落としたのか、わからないのである。会話そのものが短いことをフィールドワークから見してみる。

2004年8月22日 八王子のファミリーレストランゲストでおそらく高校生のカップル 録音

A: 飯、食い終わったらファミマ行かぬー?

B: いいよー

A: っていうかこのあとどうする?

B: なんでもいいよー

A: あっそうそう、お前さー俺の財布持ってるよなー?

B: えっ知らないよー

A: まじかよー (かなり笑いながら)

B: あっ財布見つけた (自分のかばんから財布を出して)

A: うわーまじかよ。ちょーうぜー

(Bはメールを返していた)

A: あれ……あいつ同じ学校のやつじゃねえ?

B: えー知らない

A: 学校じゃあちょー暗いのになと歩いてるじゃん

B: どーでもいいから行こうよ

A: ねみ—— (眠いの意)

(2人はレジへ向かった)

この2人は転々と話題を変えた。この他にもBは自分のメールの話から、何の受け答えもなくファミリーレストランのジュースのお代わりの話に飛び、その後はバイトの愚痴、そこからバイトでの変な同僚の話、友人の話、と相当な数に及んでいた。メールをしている時間と電話がAにかかってきた以外は絶え間なくしゃべっていた。

### 3. あいまい言葉

日本人は欧米の人から言葉があいまいとよく言われる。海外の留学経験からもよく語学学校の先生に Maybe と言うと、注意された。日本にはあいまい文化が反映しているといわれているが、それは若い世代にも受けつがれているようだ。ここでは若者のあいまいな言葉は何なのかを①女性、②男女共に使うあいまい語、という視点から考察した。なぜ男性がないのかというと、女性は男性の語をほとんど模倣してしまい、男性のみのものは、まれであるからである。

#### ① 女性の使うあいまい語

女性がよく使うあいまい語として「……みたいなー」や「……って感じ」は自分の気持ちや気分を説明するときに乱用しているようにフィールドワークから感じた。「ちょっと腹立つみたいなー」「意味分からないって感じ」はどちらも、少し言葉を和らげているように思うが、どちらにしても全部、断定している言葉ではなく言葉を濁す意味で、自分の気持ちは絶対的ではなく「たぶん……である」ということをあいまいに相手に伝えるときに使うように思う。そのほかにも「私的には……」「なんかー」「……系」などもある。それぞれ例をあげていくと、「私的にはカラオケで全然 OK だよ」「なんかー今日は体調悪い感じ」「おしゃれ系の人に昨日ナンパされちゃったー」といった使い方である。ここであげたものは男性も使うことがあるが比較的、女性が多く使う語なのでこの節に書いた。フィールドワークから「系」の使い方をみしてみる。

2004年8月23日 新宿 喫茶店 女性2人 録音

A: この間、気に入ってたあの店のあの服……さっき見に行ったらもうなかったんだけど……やばい系じゃない?

B: やばい系だねー

A: まじ・・もう売れちゃった系だよねー

B: 確かに……あの服, 人気あるっぽいもんねー

A: まじーちょーうざい系

2人して15秒程度の中で「系」という言葉が4回も出てきている。この2人もこの後「系」がかなりの回数出てきた。また「もう売れちゃった系」のように聞いていて違和感のある使い方をしているのが特徴であった。また「人気あるっぽい」もあいまい語といえるのではないだろうか。このように若い女性はあいまい語を会話の中に多く、混ぜている。

#### ② 男女共に使うあいまい語

会話の中で YES か NO を迫られる質問には「たぶん」を付け加える。例えば「今週の日曜

若者ことばをフィールドワークする

日に渋谷に行かない?」「たぶんその日は違う用がある」または「たぶん暇だよ」というように使用する。

また最近の流行語として「……とか」も挙げられる。意味はあまりない言葉だが語尾に多くの若者が使っている。多少セリフを和らげる効果があるように感じ、私も使うことが多い。「明日どこに行く?」「明日は映画とかどう?」のように使う。また人を攻撃する際に「お前は本当にわからずやだなーとか思われるよ」と無理して使うケースもある。少し目立つように感じるが「……とか」によって言葉の意味を和らげている。

他にも、質問に対して使われる「確かに」という返答の仕方がある。これは軽くは同意をしているが、気のない返事である。「確かにそう思うが……」と……が続く返事である。この言葉はかなりいい加減かつあいまいでどの質問にも対応できる言葉ではないだろうか。例としては「この新発売のジュースうまくなー?」「確かに……」一応同意はしているものの、この言葉の後にはと何も続かない場合も多い。

それから返答では「微妙」という語がある。これはまったくどちらか判断がつかない時、分からない時に多く使われる。「明日〇×ちゃん暇?」「微妙……」というように使われる。完全にあいまいな言葉であるといえる。このケースなら明日は遊べないという意味であり、それを誘った者は理解し、誘われた者はだめとは言う必要がないわけである。微妙はいつでもどこでも使える言葉であって「この音楽は微妙」、「マック食いたくなえ?」「微妙」、「明日一限から学校だーちょー微妙じゃない?」など、どうとでも使いこなせるのが特徴である。

「フツーに」という語も最近よく使われる。「明日はフツーに忙しい」や「芸能人の〇×はフツーにかわいい」というように使う。

#### 4. 敬語を使えない会話

最近、若者が敬語を使わなくなったことは多くの論者も述べている。確かに年上の人、お客さんなどに敬語を使わなくなった面もあるが、逆に新しい敬語を使い始めたように感じる一面もある。ここでは①敬語を使わない会話、②新しい敬語という2点から考えてみた。

##### ① 敬語を使わない会話

現在の若い世代の社会ではノリが重視されている。ノリ中心の文化ではフレンドリーなことが重視される。自分の友達はもちろん、初対面の人にも「どうもー」「あつ、そのスニーカーいけてるじゃん」となれなれしく話しかけることはしばしばある。合コンに行くと、女の子は年下のケースが多いが、そこでも、敬語はほとんど使われない。フレンドリーな方が好まれるのである。

店員さんとお客さんでも、敬語でないケースがある。先日、携帯電話専門のお店でパソコンのADSLの説明を聞くと若い女の子が延々と若い人の言葉でいうと「タメ口」(同年代や仲のいい人と使い合う言葉)で「これはまじ早いし……お勧めって感じだよ。でも逆にこっ

ちはやっぱこの紙見ても分かるみたいに、やっぱ高いじゃん？」と説明された。怒る人は怒るのではないだろうか。

若い世代のタメ口はお客さんであっても、学校の先生であってもフレンドリーな関係を築こうとする傾向がある。

## ② 新しい敬語

上ではまったく敬語を使わないことを指摘したが、さすがに学校の先生、初対面の人、先輩には多くの若者は新しい敬語を使う。それは「……っす」「……っすか？」である。例をあげると、先輩が部活で「○君、ボールを取ってきてくれ」に対し後輩は「わかりました。ボールっすね、何個っすか？」といった具合である。また私がお客さんとしてコンビニでタバコを買うときに「マルボロのソフトパックを」というと店員、バイトの大学生か高校生が「マルボロソフトパックっすね」と切り替えしてくるのである。これはファミリーレストランなどになっても変わらない。さすがに注文の時はマニュアル通りに来るが、もし私の頼んだ注文と違うものがテーブルに持ってこられた時に「これ違うよ」というと、「あれっ、ハンバーグステーキセットじゃなかったっすか？」となってしまった。

このように今までの「……です」「……ですか？」ではない新しい敬語を堂々と若者は使い、それを年の少し離れた先輩が敬語として認めているのである。だから「……っす」と言っても、それを気にする先輩もいないのである。

また年下から年上の人には多くの者が「まじっすか？」を乱用する。先輩や年上の人から年下の人に話をするとき、「まじっすか？」を使う。そしてそれ以上は何も触れないことが多い。先輩が「昨日、車で路駐つかまっちゃってよー」後輩は「まじっすか？」と言い、それで会話は終わってしまうのである。これは特に男性に見られる傾向である。

2004年8月30日 八王子のファミリーレストランで男性2人の関係は高校時代の先輩Aと後輩Bの関係で現在は大学生 録音

A：お前まだタメの奴らとつるんでんの？

B：そこそこ会ってますよ

A：そっかーいいなー俺なんかみんな働き始めちゃって、全然会ってねーぜ

B：まじっすか？

A：けど、やっぱいいよなー大学生は

B：っすかね、でも僕もCとDとは、よく会うんっすけど、他のやつらとはまったくっすよ

A：そうなんだ？

B：っすねー

久しぶり会ったようで、2人は案外、無言が多かったがこの部分だけを見てもわかるよう

若者ことばをフィールドワークする

に、敬語を使うべきところのようだが、Bは「……っす」をほとんど使っていた。

あいづちも「っすねー」などが多く目立った。この部分の会話では「まじっすか？」は1度しかでてこないが、約40分とったテープには合計17回Bは「まじっすか？」を使っていた。会話はほとんどが先輩Aから始まり、Bからは1回しか先輩Aに質問をしなかった。

2004年9月25日 女性、先輩Aと後輩B 高校生 録音

Bさんの彼氏が浮気をしているようでその話をAさんにしたところ

A：それってぶっちゃけおかしいって感じじゃないですか？

B：笑っているだけ

A：私だったらそんなことされたらまじなぐっちゃうかもーですよ

B：笑っているだけ

後輩のAさんは常に会話の後に「……ですよ」をつけて敬語にしているように聞こえたが、実際ほとんど同級生との会話とかわらず若者の言葉で言うタメ口に近かった。語尾だけは必ず「……です」はついていたものの聞いている限りでは敬語ではないように思った。うへの会話のほかにも「私ってすごく電話が好きだから、いつも誰かと夜は電話してるんですよ」や「もう私的には前のことがあるから、彼氏は当分いらないうって感じです」など途中までは、タメ口であることがかなりの特徴であった。

### 第3章 態度にみる会話の特徴の要因

#### 1. 聞き下手な態度

最近の若い世代の中では「聞く」のではなく「話す」ことの重要性が認識されているのかもしれない。だから、おしゃべりの人に注目が集まったり、学校で人気者になったり、人からうらやましがられるといった傾向があるようだ。実際に「お前、しゃべり得意だからいいなー」といった会話を耳にすることはしばしばあるが、「お前、話を聞くのがうまいなー」という会話は耳にしたことがない。しゃべりのうまい人に敬意を持つことについて、内田樹が『死と身体 コミュニケーションの磁場』で次のような指摘をしている。自分の意見をうまく話せない人には「自分の意見をいいなさい」と今の学校では教育され、意見の言えないシャイな人は、人間的に「自己決定できない人間」と低い評価しか受けないといっている<sup>1)</sup>。つまり日本の学校教育では「話す」ことに重点が置かれて「聞く」ことには重点が置かれていないというのである。

では、アメリカではどのような教育が行われているのかというと、中島義道は『対話のな

図1 「第3回ことばに関するアンケート」

	合格者		不合格者	
	n=1210		n=489	
1. はい	469	38.8%	193	39.5%
2. いいえ	209	17.3%	85	17.4%
3. わからない	527	43.6%	203	41.5%
無回答	5	0.4%	8	1.6%

資料出所：生涯学習検定センター 2002年7月調査、検定の受験者対象

い社会』でアメリカと日本の教育の比較について、討論の場が欧米に比べて日本には欠けているという<sup>2)</sup>。また井上宏も『笑いの研究』の中で、アメリカではよいプレゼンテーションをして、活発な議論をできないとよい点数は取れないことを説明している<sup>3)</sup>。このようにアメリカでは小さい子供のときから「話す」ということが教育されていると同時に、プレゼンテーションなどで相手の話を「聞く」ことも身につけて、それに対して自分の意見を「話す」ことに重点が置かれている。しかし、現在の日本の学校では、いくら授業中に先生の話を読んでも評価されない。評価されることは読み書きのテスト、もしくは暗記のテストである。それが話を聞かない若者を生む1つの要因になってるのではないだろうか。

では、このような教育を受けた若者は「聞く」ということをどのように考えているのだろうか。2002年7月の生涯学習検定センターの「第3回ことばに関するアンケート」を参考に、考察してみたい。

以下では受験生にアンケートをとっているために合格者と不合格者に分かれているが、特に差はないようなので合格者を基準に考えている。

「あなたはふだん、自分が言いたいことを相手にきちんと伝えられていると思いますか」という問いに対し、約39%の人が「はい」と答えているが、17%の人は「いいえ」と答えている。注目したいのが「わからない」の約43%である。これは自分の話した内容が伝わっているか自信を持っていないというように考えられる。どちらにしても、約60%の人が伝わっているのか自信を持っていないのである。この資料からも若者は話すことに熱心で、聞くことに重点が置かれていないことが分かる。

人の話を聞かない傾向の背景には教育があり、60%もの若者が相手に話が伝わっているかどうか自信を持っていない。これは若者だけにいえることなのだろうか。宮川俊彦は『本当の日本語力もってますか』の中で日本人の文化という側面から日本人の会話を考察している。「日本人は言葉によって判断し、言葉によって色分けする文化が生きているようで、実は生きてない。ある意味で、そこまで言葉に重きを置いていないのである。つまり日本人は言葉を聞いたり話したりしてお互いを理解するよりも相手の空気を読みながら、相手の考えていることを察することが重んじられている」<sup>4)</sup>という。日本人は察することに重点を置くの

若者ことばをフィールドワークする

である。話を聞こうとしないのは若者だけではなく大人たちにもいえることなのではないだろうか。中島義道も日本人の文化という視点から会話について『対話のない社会』の中で書いている。「日本人は言葉を額面通りに受け取るのではなく、言葉と字面が微妙にズレるところを了解することに独特の美学を認める」<sup>5)</sup>という。このような日本独特の文化が若者にも影響していることが「話を聞かないこと」の大きな要因の可能性が高い。

しかし、上で説明した教育と日本文化だけが「聞き下手」を生んでいるのかといえるわけではない。中島は日本人の話を聞かない原因について、日本特有の標語や町中の放送、例えば成田空港の「日本人は日本人と表示されているカウンターに並んでご順に審査を受けてください」や「交通規則を守りましょう」などの放送を私たちは「聞き流す」態度を産出していると指摘している<sup>6)</sup>。確かに私たちは数多くのこのような放送が外に出ると必ず遭遇する。電車やバスの放送を始め必要でない情報は右の耳から左の耳へと聞き流す行為をとっている。私が経験したカナダのバンクーバーでの約9ヶ月の生活では、電車もバスも一切、次の止まる駅を教えてくれなかった。アメリカでも街頭でのエンドレスな放送は耳にしなかった。このことも日本人の聞き下手を生んでいるだろう。

聞き下手が生まれる要因について考えてみたが、以下では若い世代だけにいえる聞き下手という特徴は何なのかについて書いた。

若い世代だけの特徴とは、唐突な話の変化である。フィールドワークからも得られた、流行語である「……っていうかー」や「聞いてー」などを使うことによって自分だけの話をすることや「自分は……」「自分は……」といった会話の形態が若い世代だけに見られる特徴ではないだろうか。

若い世代は上で書いてきたように、話を聞くのが下手であるが、相手のことを理解しようとはしている。では若者はどのように、相手の言ったことを理解するのだろうか。そこには「しぐさ」や「感情」が関係しているのではないだろうか。例えば私の学生時代に、学校で先生が「そこうるさいから静かにしなさい」と言ったとすると、学生はその言葉は理解せずに、また私語を始める。しかし、先生が「うるさい」と感情をぶつけたら、学生たちは静かになり、再度、私語を始めない。そこでは「うるさい」という言葉を理解したのではなく、先生の「しぐさ」と「感情」からコミュニケーションが成り立ったのではないだろうか。若い世代では「しぐさ」や「感情」には敏感で、相手のことを分かろうと努める傾向があるように思う。内田も上で述べた同書の中で、身体が発信するメッセージというものがあり、相手の言葉が理解できていなくても、コミュニケーションのコンタクトは成立していることがあるという<sup>7)</sup>。若者は耳から言葉を聞くだけでなく、身体から表出する「感情」や「しぐさ」を感じて、相手とコミュニケーションをとろうとしている傾向もあるのではないだろうか。



## 2. 笑いを意識した態度

聞くことは笑うことに関係を持っている。つまり人の話を聞くことによって笑いが発生することは多い。では人の話を聞かないのに、どうして若い世代は笑えるのだろうか。そこには2つの理由がある。1つ目は長いセリフを聞いて笑うのは難しいということである。上で述べたように、長いセリフには若者は耐えられない傾向がある。だから若者の笑いの種類には、ギャグのような一言のセリフや、ものまねのような一瞬で判断のつく笑いが流行している。またボケ、ツッコミのある会話においてもあまり聞いていなくてもツッコミができる程度のボケが主流であることがフィールドワークから分かった。このようなすぐに判断できるものだけが若い世代での笑いのように感じる。だから落語のような長い話の後に来るオチでは、話を聞けないから面白くないが、最近の漫才のようにすぐに笑える部分に分かり、次々に笑わせてくれるものを好むのではないだろうか。

もう1つの理由としては上で述べた「相手の言いたいことを察する」が影響していて、笑うところか、笑わないところかを瞬時に見分けているのではないだろうか。だから面白くなくても笑うところなら笑うし、面白くなくても笑ってはいけないところでは、笑わない。「笑うところ」か「笑わないところ」が若い世代では、重要であって、それを察することを重視しているようである。だから話を聞いていなくてもみんなが笑ったから笑う、相手が笑っているから笑うといった「察する」行為をしているから話を聞いていなくても笑えるのではないだろうか。このことをふまえた上で笑いを意識した態度の要因について以下で書いている。

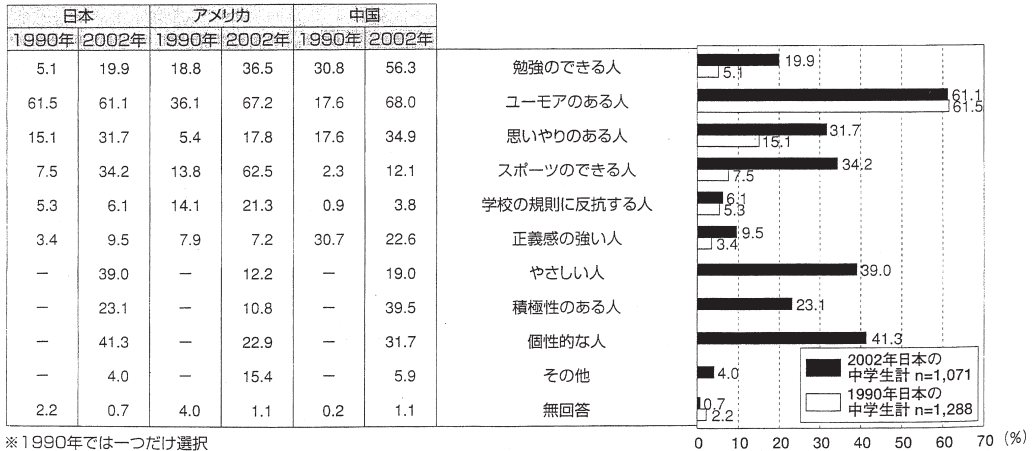
要因の1つ目としては、テレビをつけると毎日、ゴールデンタイムにしても、深夜にしても、バラエティー番組が必ず放送されている。多いときは同じ時間に3-4つテレビ局が視聴率競争のために多くのお笑いタレントを起用し、バラエティー番組を提供している。その番組に出演しているお笑いタレントは好感度調査でも毎年上位に入る人が多い。

そのような中で、若者はそれらを模倣することによって、または面白い人になることで、自分の学校のクラス、異性にも人気が出ることを知っている。以下の調査を見ると面白い人が人気者になれることがわかる。

対象者は中学生であるが「どのような人がクラスで人気者があるか」という問いに対し、クラスで1番人気のある人は61%がユーモアのある人である。2位は個性的な人で41%とユーモアがある人が人気を集めている。だから若者はバラエティー番組をチェックし、それを模倣しているのではないだろうか。最近の傾向だと、「ボケ」や「ツッコミ」という意識を持っている。この「ボケ」「ツッコミ」は関西のものとされていたが、現在はテレビでのお笑い芸人の「ネタブーム」<sup>8)</sup>が大いに影響しているだろう。それらを関西以外の若者が模倣し、自分の友人と「ボケ」や「ツッコミ」で会話を楽しんでいる。

しかしこれらの若者の「面白いこと」が好きな要因はマス・メディアからだけの影響なのだろうか。香山リカはテレビ以外の影響を2つの点から考察している。まず1つは「笑いを

図2 「中学生の生活意識に関する調査」



取る」行為は、日常生活の中で最重要で最難関の行動であるという。そして何かを見たり、誰かに会ったときに、笑いで反応するということは、若者にとって最高の「おもてなし」と指摘している<sup>9)</sup>。

もう1つは、「笑う」という行為は自らがその場に参加している気分を味わさせてくれるもので、誰かとの会話の際に、一方的に見たり、聞いたりしているだけでは、楽しんだという気になれない。むしろ、そうしていないと仲間はずれにされているように感じてしまう。だから笑いを大切にするとやっている<sup>10)</sup>。

これら3つのことが原因で、若い世代は笑いに重要な価値観を置き、会話に取り入れる要因ではないだろうか。

しかし、これらの特徴は、特に男性にいえるように思う。森下伸也も『もっと笑うためのユーモア学入門』の中で男女の笑い観について「積極的にジョークをとばし、笑わせる側にまわることについて、概して男性は女性よりも圧倒的に熱心である」<sup>11)</sup> といっている。つまり女性は積極的に相手を笑わせようとはしない。だが、笑うことには興味もあるし、好きだし、面白い人には好感を持っている。

では、若者以外はどうかだろうか。井上宏は『笑いの研究』で日本人には、なぜ笑い文化が浸透しないのかを書いている。日本はサムライ社会の優劣の関係のタテ型社会が伝統であり、そのような社会で人を笑うという行為は、ひんしゅくを買うとされている。つまり笑いには攻撃的な要素があり、そのような社会では抑圧されてしまう。例外的に関西では商人の町という背景があり、日本でもヨコ型社会と井上はいつている。そのような中では笑い文化が発展していたので、日本でも特殊であることをいっておきたい。

大阪と同じようにアメリカのような、個人と個人の繋がりがヨコ型の社会では言葉が重要

になり、コミュニケーションで、交渉をするから、争いを避けるために、笑いが必要とされ、発展することをいっている<sup>12)</sup>。

このような説明から日本では、学生が社会に出ることによって、どうしても上司や先輩といった縦の関係がついてきてしまうので、学生も会社に入ることによって、笑いが必要ではなくなってしまうのではないだろうか。2005年1月3日の朝日新聞の「笑いに関する世論調査」からも「人を笑わせることが好き」だという人は、20代が74%で最も多く、40代で64%、50代で58%と減っていき、70歳以上では50%だった<sup>13)</sup>。

つまり、笑いを重要にしているのは若者であり、会話に笑いを混ぜることも若者の特徴といえる。

## 第4章 言葉づかいにみる会話の特徴の要因

### 1. 人まねの会話

若者は自分の真似の出来そうで使えそうな言葉をテレビ、身近な友人や家族から仕入れているようである。このことを明らかにするために、米川明彦の『若者語を科学する』の「若者語の使用率」を参考に考察した。

ここにある13語のうち、現在も使われている語（「現代用語の基礎知識」に載っているもの）は「すっぴん」「きしょい」「爆睡する」「エッチする」「ぶっちする」「お茶する」「ドタキャン」の7語である。

上であげた7語の発信源を調べ、マス・メディアでの流行か、自然発生したものかを分類して、どこから若者が真似をするのかについて調べるために、亀井肇の『若者言葉辞典』、米川明彦の『若者語を科学する

<http://www001.upp.so-net.ne.jp/fukushi/year/words.html>「20世紀の流行語」を参考に書いた。

「すっぴん」 女性雑誌などによって若者に広がった

「きしょい」 東京でも「きもい」という形で使われている。「きもちわるい」も略語 発信源不明

「爆睡する」「爆」の流行によって作られた語。発信源不明

「エッチする」 1990年代、テレビで耳にすることが多くなり広がった。「エッチ」自体は「HENTAI」のHから来ており1950年代から若者に使われている。

「お茶する」 1973年のヤニとりのパイプのCMで「タバコする」から「名詞+する」の流行により「お茶する」「映画する」などが若者に広がった。

「ぶっちする」 関西の若者から発信、自然発生

図3 「若者語の使用率」

言葉	使用する			使用しない			無回答	
	女(人) (%)	男(人) (%)	合計	女(人) (%)	男(人) (%)	合計	女	男
けばい	183	111	294	7	9	16	1	0
	95.8	92.5	94.5	3.7	7.5	5.2	0.5	0
すっぴん	176	107	283	14	13	27	1	0
	92.2	89.2	91.0	7.3	10.8	8.7	0.5	0
きしよい	172	109	281	16	11	27	3	0
	90.1	90.8	90.4	8.4	9.2	8.7	1.5	0
爆睡する	150	114	264	41	6	47	0	0
	78.5	95.0	84.9	21.5	5.0	15.1	0	0
エッチする	160	106	266	30	14	44	1	0
	83.5	88.3	85.5	15.7	11.7	14.1	0.5	0
お茶する	139	61	200	52	58	110	0	1
	72.8	50.8	64.3	27.2	48.3	35.4	0	0.8
ぶっちする	98	91	189	91	28	119	2	1
	51.3	75.8	60.8	47.6	23.3	38.3	1.0	0.8
ダサダサ	123	79	202	66	40	106	2	1
	64.4	65.8	65.0	34.6	33.3	34.1	1.0	0.8
お気に	77	37	114	112	82	194	2	1
	40.3	30.8	36.7	58.6	68.3	62.4	1.0	0.8
下痢ピー	88	47	135	101	72	173	2	1
	46.1	39.2	43.4	52.9	60.0	55.6	1.0	0.8
イタめし	82	61	143	108	58	166	1	1
	42.9	50.8	46.3	56.5	48.3	53.4	0.5	0.8
アバウト	112	72	184	79	47	126	0	1
	58.6	60.0	59.2	41.4	39.2	40.5	0	0.8
どたキャン	101	51	152	90	68	158	0	1
	52.9	42.5	48.9	47.1	56.7	50.8	0	0.8

資料出所：米川明彦の『若者語を科学する』 P135 1995年11月～12月 大学に通う男女311人対象

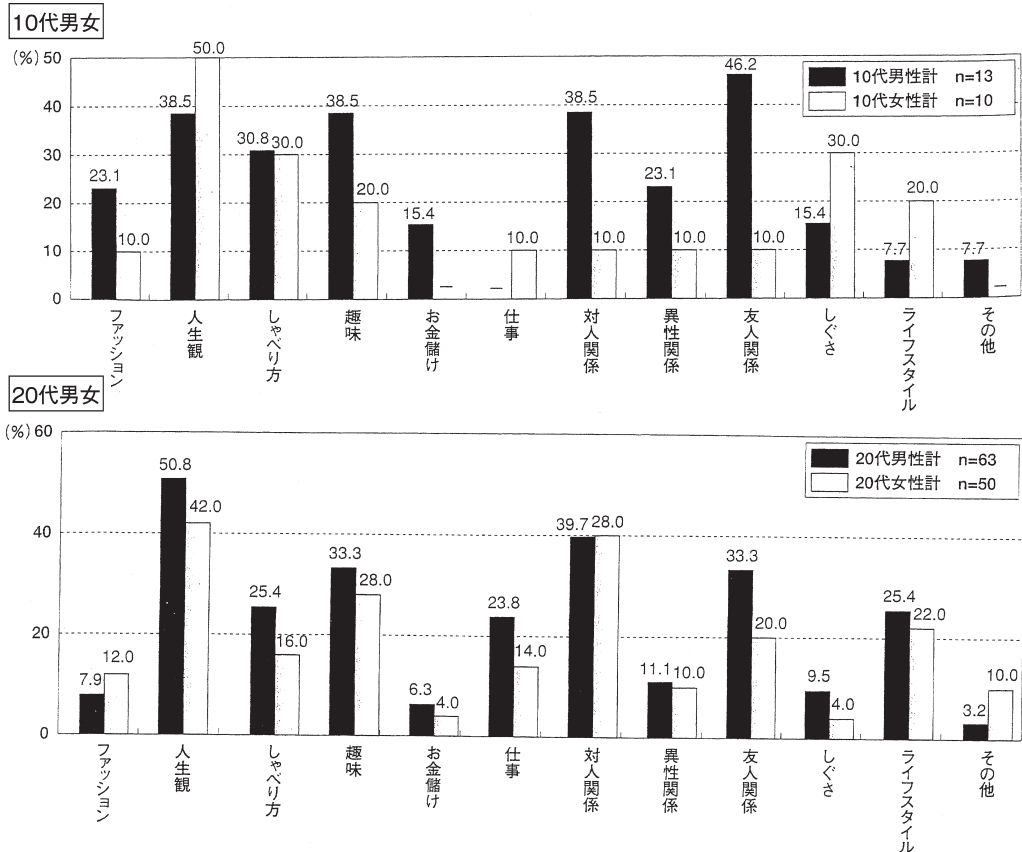
「ドタキャン」一部の業界用語だったがテレビ番組で使用されることで広がった

このように発信源はマス・メディア、特にテレビから発信されたものや、どこからともなく自然発生したものであることがわかる。

もう1つ、資料を参考にして、しゃべり方について友人からの影響を受けていることを明らかにしたい。そのためにフルキャストの「若者が影響を受けた『人』『モノ・コト』、若者の挨拶観に関するアンケート」を示した。

注目したいのはしゃべり方である。10代の方は、しゃべり方の影響を他人から受けている

図4 「若者が影響を受けた『人』『モノ・コト』, 若者の挨拶観に関するアンケート」



資料出所：フルキャスト 2002年5月 同社オフィスサポートに登録している18歳～38歳までの学生アルバイト、フリーター（登録スタッフ・派遣スタッフなど）の男女対象

と答えた人は男性30%, 女性30%であり, 20代では男性25%, 女性16%と自分自身ではしゃべり方が他人から影響されたと考えている人は意外に少ないように感じる。

次にこのような人まねの要因を考えるにあたって, 文化という側面からみてみた。日本には「出る杭は打たれる」ということわざがある。これは他の人から出っ張らない方が良いという意味でもある。つまりみんなと一緒にの方が, 良いとされる文化があるのである。加藤恭子, マーシャ・ロズマンの『ことばで探るアメリカ』の中ではアメリカと日本の文化を比較し, 北米は個人を主体とすることが重要な社会だが, 日本はみんなと一緒にであることが重要な社会であるといっている<sup>14)</sup>。このことが誰かを模倣するといった行為に大きな影響を与えているのではないだろうか。

武田徹は『若者はなぜ繁がりたがるのか』の中で, なぜ現在の若者は, 自分たちだけで通じる言葉を使うのかということについて考えを述べている。若者はみんなと同じ言葉をしゃべらないと, 自分が仲間はずれになってしまうと, 若者は考えるのではないだろうか, とい

若者ことばをフィールドワークする

う<sup>15)</sup>。ここであげた2点からも、若者はみんなと一緒にいいから、言葉を友人やマスコミから模倣するのではないだろうか。そして、仲間内だけの共通語、もしくはギャル語、茶髪の男同士のえらそうな言葉を使い、仲間の意識を高めているように感じる。もしそれらをしないとみんなから、はみ出してしまうのである。

若者のことを上で書いたが、若者だけが模倣という行為をすることは出来ない。なぜなら、社会に入っても業界用語があり、そこには模倣という行為が存在するからである。業界用語は模倣、または記憶するという行為でそのグループ内で、円滑にコミュニケーションを取るためにあるといえる。しかしそこには若者がしているように、楽しむという考えはないだろう。だから模倣し流行語を作り、仲間同士で楽しむということは若者に限定されたものといえるのではないだろうか。

## 2. 言葉の短縮化

省略語の流行の背景には4つの要因が考えられる。米川は『若者語を科学する』の中でそれら要因の説明をしている。1つ目に現代社会のスピード化である。現代はあらゆる面でスピードを求められる。限られた時間内で効率よく、大量のものをこなすことが求められている。そのような中で若者は、話し方自体を速くするだけではなく、言葉を縮めて、会話促進のために言葉の省略が進んだ。

2つ目の要因としては、現代社会は自由を求めてきた。その結果、個人の自由が拡大した一方で、自己を含めてあらゆる事柄の意味があいまいになったり、価値を見失い、アイデンティティーを失った。そのような中で、事柄を言語化することが困難になった。また、仮に言語化しても意味はあいまいで浮遊している。そういう言葉は軽く、扱い方も軽い。そこから言葉がどんどん省略化されていったと考えられる。

3つ目の要因は言葉の娯楽化である。若者は会話を楽しむために使う。したがって既存の語だけでは、会話は盛り上がらない。そこで言葉を省略して、従来の語とは違った語感を持たせて、おもしろさを出し、会話を盛り上げているという<sup>16)</sup>。

4つ目の要因としてはこの章の1, 人まねで述べた、仲間内で通じる言葉で仲間意識を高めているということも考えられる。

このようなことから若者は名詞を短縮化したり、形容詞を短縮したり、文を短縮しているようである。しかし若者だけが言葉を短縮しているのかというと、そうではない。亀井肇は『若者言葉辞典』の中で短縮語は若者だけのものではないと指摘している。「若者たちは仲間内で略語や流行言葉を多く使う。それは若者グループに属しているからこそ理解ができる内容であり、一般用語を使って話すようなまどろっこしく面倒な言葉を使わずに楽に話すものである。またそれは中高年が使う業界用語や略語と同じものである」<sup>17)</sup>という。このことから上の世代も省略語を使うことがわかる。また内田は話を簡単にしたがることに国中が熱

狂しているという。若者だけではなく、政治の世界からメディアの世界まで「できるだけ少ない語彙」でセンテンスを「言い切る」ことを説明している<sup>18)</sup>。スピード化した社会では言葉を短くして相手に伝えることが重要視されていて、それは若者だけに見られる特徴ではないようである。

では、若者だけの特徴は何なのかというと、短縮語を次々と作ること、そしてそこには流行があり、新しく言葉を作ると、今まで使っていた言葉は消えていくことなのではないだろうか。内田も新しい言葉を若者が獲得しても、それによって語彙は増えない、そして、ひとつ流行るとひとつ消える。つまり語彙そのものがゼロサム構造となっているといっている<sup>19)</sup>。これは、この言葉の短縮化だけにいえることではなく、人まねの流行語という特徴にも当てはまるのではないだろうか。

### 3. あいまい言葉

あいまい言葉の背景には「思いやり」と「やさしさ」があるのではないだろうか。なぜなら、若者は自分のしゃべる言葉を選び、言葉をあいまいにすることによって、相手を傷つけないようにしているからである。中島は上であげた同書の中で、対話（お互いの意見や考えを直接ぶつけあうこと）をつぶす要因として、「思いやり」と「やさしさ」のことをあげている。若者は誰かを傷つけないような言葉を発していることを言っている<sup>20)</sup>。誰かを傷つけないようにしゃべることは、これは言葉をあいまいにすることによって、若者の間で避けられているのではないだろうか。だから若者は自分の意見や発言には「……とか」や「たぶん……」といった、自分の責任を和らげる言葉を多用し、相手からの質問に対しては「微妙」や「確かに」といった言葉を使っているのだと思う。

図4を見ると若者が「思いやり」や「やさしさ」をかなり重視していることが分かる。「思いやり」と「やさしさ」はそれぞれ35%くらいの人が、気にしていて、思いやりのある人、やさしい人は人気があることを認めている。他人を傷つけないために言葉をあいまいにして、相手に配慮することが「思いやり」と「やさしさ」で、言葉をはっきりと言うことは他人に対して、配慮、思いやり、優しさがないように聞こえてしまうのである。

では、若者だけがあいまいなのかというとそうでないように考えられる。カナダでの海外留学で、私が最も気になったことは、語学学校でカナダ人に「YESかNOかはっきりしろ」とよく言われたことである。先生が「今週末のパーティーに行く？」と生徒に質問すると、日本人は「Maybe YesまたはNo」という。すると先生は「どっちなんだ、はっきりしろ」と怒る。この日本人のあいまいさがカナダ人には不快なものであったようだ。語学学校には若者が多かったが、40代の人もいたし、50代の人もいた。しかし日本人は「Maybe」を用いていた。

言葉使いにおいても、若者だけがあいまいではなく、もっと上の世代もあいまいだと指摘

若者ことばをフィールドワークする

をするのは、武田徹である。『若者はなぜ繋がりがたがるのか』の中で文部省の国語審議会委員を務めていた俵万智の言ったことを引用している。俵は「若者が『……みたいな』や『……系』のように曖昧な口調がよく指摘されるが上の世代の『日曜あたりにゴルフでも』というのと同じ<sup>21)</sup>」といい、武田自身も共感している。

このように私の感じていた若者だけに共通するあいまいさは日本人全体のものであって、言葉使いにおいても若者の「……とか」や「たぶん……」と同様に、上の世代でも「……あたりに」や「……でも」も同じあいまいな言葉なのである。

#### 4. 敬語を使えない会話

若い世代は敬語についてどのように考えているのだろうか。2004年1月の「国語に関する世論調査」文化庁文化部国語課の調査をみると若い世代は敬語を必要だと考えているようである。

この調査の総数は若者だけではなく16歳以上の男女で年配者まで含まれるものである。ここでは96%の人が必要と考えている。若い世代を見てみると男性は「必要だと思う」と「ある程度は必要だと思う」と

考える人を合わせると、16歳から19歳で88.9%、20歳から29歳で92%である。女性は16歳から19歳で94%、20歳から29歳は97%である。それぞれのデータから「必要だと思う」と「ある程度は必要だと思う」の割合は差があるが、合計してみると約90%の人が必要だと考えていることが分かる。

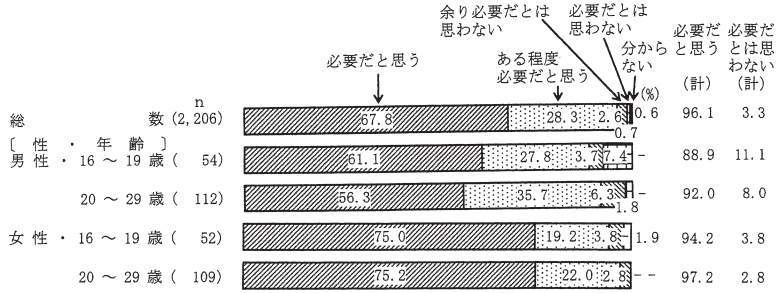
このように敬語は必要と考えているが、実際は使われていないように感じる。しかし私の述べた「……っす」や「……っすか？」は若い世代にとっては敬語なのである。だからそれを考えると年下の人は敬語を年上の人に使っているのである。だが、その新しい敬語すら使わないで「タメ口」を使う若い世代も多いのも事実である。

「タメ口」の背景には4つの要因がある。まず1つ目の要因は言葉の単純化である。このことについて内田は上であげた同書の中で、「タメ口」というひとつの道具で全部の用事をすませようとしている「手抜き」な生き方が若者の中で蔓延しつつあることをいっている<sup>22)</sup>。つまり敬語などというまどろっこしいものを使うのではなく、「タメ口」ひとつで、すべての会話をすればいいではないか、という考え方が若者に広まっているということである。

2つ目の要因は、上下関係で敬語に頼らないという傾向があげられる。若者は難しい敬語に頼るのではなく、敬語以外の何かで目上の人との関係を保とうとしているのである。香山は上であげた同書の中でそれについて説明している。「敬語を身につけてない若者でも、決して人間関係を軽視したり、鈍感になっているわけではない。逆に、通りいっぺんの敬語を使う以上のエネルギーを使って、なんとか自分の気持ちを伝え、関係を良好にしようとしている<sup>23)</sup>」と指摘する。香山は若者が敬語を使うことはできないが、非常に人間関係を重視して



図5 敬語の必要性「国語に関する世論調査」



資料出所：文化庁 2004年1月～2月 全国16歳以上の男女3000人対象

いることをいっている。

3つ目の要因はマス・メディアである。上で述べた新しい敬語はテレビを中心に多くのタレントが使用している。奥秋義信は『誤用乱用テレビの敬語』でマス・メディアからの影響のことをいっている。「若者の傾向として、人間関係への敏感さがあげられます。自分中心といわれる世の中で対人関係を気にするのが、現代の若者です。言葉のうえでは『お』『ご』の使いすぎや、二重敬語となって表れる。またその原因にはマス・メディアがかなり拍車をかけている」<sup>24)</sup>という。ここでは二重敬語の話だが、それは「……っす」や「……っすか？」にも言えることではないだろうか。実際、テレビでのタレント達が使う言葉は本来のものとは違う。テレビの中だけの言葉なのである。私が吉本興業に入ってからすぐに教わったことは「舞台やテレビ、ラジオでは先輩に敬語を使う必要はない」ということであった。テレビなどのマス・メディアからの模倣の行為は4章の1で述べた。この敬語に関しても、マス・メディアでの言葉の模倣という行為がなされているのである。

4つ目の要因としては、目上の人と話す機会の減少と価値の低下である。現在、社会に出るまでは多くの若者が親以外に年上の人と話す機会が減っているのではないだろうか。学校に入学すれば部活に入ることができ、そこには先輩がいるが、多くの中高生は同じ学年の友達としゃべり、最低限の会話のみを先輩と話す者が多いように感じる。

価値の低下については香山が空疎な敬語のやりとりとして、説明している。具体例として、明らかに相手を目下にしてしているのに「○○様のお考えにも一理あると存じますが」などと口にする上司や、バイト先で客からクレームをつけられたら、ひたすら「心からおわび申し上げます」と頭をさげればいいと教える店員が例にあげられている。そのような形としての敬語は意味を持たないと考えている<sup>25)</sup>。だから若者は敬語の価値を見失ってしまっているのではないだろうか。これら4つの要因によって、若者は敬語を使わなくなっているのではないだろうか。

## まとめ

現代の多くの若者は私のあげた6点のうち1つは問題として持っているのではないだろうか。特に人の話を聞かないのは若者だけに限らず多くの日本人がかかえている問題のように、今回の研究で感じた。そのほかのものも日本人の特徴でもあるし、若者だけには限定されないものが目立った。

会話は、たくさんコミュニケーションツールがある中で、科学の発達とは関係なく少しずつ進化していくべきだと考えるが、実際は他のコミュニケーションが進化したためか後退していったらという点も過言ではない。

今回の録音の調査でも、会話中に必ず1度はどちらかの携帯電話の着信音があったり、メールが入ったり、メールを返している者ばかりであった。その度に会話は中断され、その話は流れてしまっている。コミュニケーションの後退の原因として携帯電話の普及、メールの機能は私たちの会話の能力を気づかない間に奪っていったらという点も思えた。

まとめということで私のあげた「態度にみる会話の特徴」の2点、「言葉使いにみる会話の特徴」の4点、計6点を1つずつまとめた。

態度にみる会話の特徴の1つ目の人の話を聞かない態度という点では、中にはしっかりあいづちを打ってしっかりと人の話を聞いている人も少数だがいた。しかしほとんどの人はあいづちという点では打つことはなかった。一見、しっかり聞いているように思えても、まったく相手がしゃべったことを理解していなかったり、意味がわかっていないのに話はどんどん進んでいたりというケースもかなり目立った。話がどんどん進む原因に、しゃべることだけに重点がおかれていることが深く関係しているようだ。お互い自分の言いたいことは、すぐにはっきりと述べていたが、相手の意見には特になにも触れないことが多かった。

2つ目の笑いを意識した態度ということに関していうと、今回、約30の会話を聞いた中で他人が聞いてもおもしろい話は1件だけであった。笑いを意識して人を笑わせようとして、発言をしている人はある程度はいた。また、特に女性にみられる傾向として、相手が笑っているから笑うことや、その場のノリがよいから大笑いをしている者も多くいるように感じた。男性同士でもこちらが聞いていて、明らかに愛想笑いだと判断のつくような人もいた。しかし全体としていえることは、おもしろい、おもしろくないは別として、会話の中でまったく笑いのないという例はほとんどなかったといえる。

その中には日本人独特の恥ずかしいから笑うや、あまりにも酷な話だから笑うほかにないから笑っているように見えたことも多くあったが、会話としては、それらを話した本人も笑い、相手も笑っていたケースが目立った。つまりお互いが楽しんでいる会話を若者は好んでいるようだ。

言葉使いに見る会話の特徴の1つ目の人まねの会話という点ではあまりよいデータが取れなかった。実際はイントネーションなどかなり、似ているが文章化することによって、あまり特徴のない会話に聞こえてしまうので今回は載せなかった。

しかし女性（特にギャルと言われている女子高生や女子大生）は本当に似ているイントネーションであり本来の日本語のアクセントとはかなり違う結果が読み取れた。

2つ目の会話の短縮化という点では、若者は常に若者同士でしゃべっているときに、自然と短縮語が出てきている。そしてそれを「えっ？どういう意味？」などと聞き返すというシーンには1度も出くわさなかった。友人同士ではしっかりと理解されているようだ。

また1回の録音時間が毎回約30分くらいであったが、その間、ずっと同じテーマについて話している者は30回の録音中、1組しかいなかった。多くのものは30分の会話の中で5-6の話があっちに飛び、こっちに飛びのような具合で会話が行われていた。ひどいケースではだいたい20個くらいのテーマが次々に変化している人もいた。

3つ目のあいまい言葉の使用という点では、女性は「……みたいな」や「……って感じ」を多く使用していて、男性は「……とか」をかなり多く使用していることに気づいた。基本的に断定することはしないのが特徴であった。断定という以前に先ほどの聞き下手でも述べたが、相手のしゃべったことに対してはあまりたいしたことは言わないのが特徴であった。

4つ目の敬語を使えない会話という点では今回、年下の人がかなり年の離れている方に話し掛けることについては録音をしなかったのが本当に敬語を使えないのかは分からないが、年の近い先輩や友人には完全に、私のいう、新しい敬語の「……っす」「……っすか？」を用いていた。

なぜか分からないがこの後輩と先輩というケースの会話が多く録音でき7回の敬語を使うべき会話に遭遇したが、男女問わず、全員がこの「……っす」と「……っすか？」を使っていた。

今回のフィールドワークによって新たな疑問が多くうまれた。ひとつは若者が沈黙に耐えられないことである。私自身も沈黙を嫌う。だから無理に相手に聞きたくないことを聞くこともある。若者は自然とそのような行為をしているのではないだろうか。そしてもうひとつ、若者は会話を楽しんでいるのではなく、しゃべることを楽しんでいる、ということである。つまり聞いてもらえる人を常に探しているのではないだろうか。冗談を聞いてもらえる人、愚痴を聞いてもらえる人などである。その疑問を今後、研究していきたいと思う。また今後のテーマとして「若者の学校での会話とレジャーのときの会話の違い」「ジェンダーにみる若者会話」「集団でいるときの若者会話」などを考えていきたい。

#### 注

- 1) 内田 樹 『死と身体 コミュニケーションの磁場』 医学書院 2004年10月 P74

若者ことばをフィールドワークする

- 2) 中島 義道 『〈対話〉のない社会』 PHP 新書 1997年11月 P100
- 3) 井上 宏 『笑いの研究』 フォー・ユー 1997年3月 P86
- 4) 宮川 俊彦 『本当の日本語力もってますか』 徳間書店 2002年11月 P16
- 5) (2) に同じ P109
- 6) (2) に同じ P71~72
- 7) (1) に同じ P76-84
- 8) 2003年頃からNHKでの「爆笑オンエアバトル」をはじめ、各局ネタ披露番組が急激に増えた。そしてそれらの番組は高視聴率をあげている。
- 9) 香山 リカ 『若者の法則』 岩波新書 2002年4月 P37
- 10) (9) に同じ P38
- 11) 森下 伸也 『もっと笑うためのユーモア学入門』 新曜社 2003年4月 P105
- 12) (3) に同じ P72・76-83・85
- 13) 2004年12月、5日6日に朝日新聞社が実施した世論調査 全国の有権者から選挙人名簿で3000人を選び、学生調査員が面接調査をした。有効回答数は1921人、回答者の内訳は男性50%、女性50%。
- 14) 加藤 恭子 マーシャ・ロズマン 『ことばで探るアメリカ』 ジャパンタイムズ 1988年8月 P206-207
- 15) 武田 徹 『若者はなぜ「繋がり」たがるのか』 PHP 研究所 2002年1月 P81
- 16) 米川 明彦 『若者語を科学する』 明治書院 1998年3月 P50-51
- 17) 亀井 肇 『若者言葉辞典』 NHK 出版 2003年7月 P4
- 18) (1) に同じ P106
- 19) (1) に同じ P106
- 20) (3) に同じ P143-144
- 21) (15) に同じ P79-80
- 22) (1) に同じ P100-101
- 23) (9) に同じ P65
- 24) 奥秋 義信 『御用乱用テレビの敬語』 講談社+α 新書 2000年11月 P4
- 25) (9) に同じ P66

#### 参考文献一覧

- 中島 義道 『〈対話〉のない社会』 PHP 新書 1997年11月  
宮川 俊彦 『本当の日本語力もってますか』 徳間書店 2002年11月  
亀井 肇 『若者言葉辞典』 NHK 出版 2003年7月  
奥秋 義信 『御用乱用テレビの敬語』 講談社+α 新書 2000年11月  
武田 徹 『若者はなぜ「繋がり」たがるのか』 PHP 研究所 2002年1月  
桜井 哲夫 『言葉を失った若者たち』 講談社現代新書 1985年9月  
千石 保 ロイズ・デビッツ 『日本の若者・アメリカの若者』 日本放送出版協会 1992年3月  
森下 伸也 『もっと笑うためのユーモア学入門』 新曜社 2003年4月  
米川 明彦 『若者語を科学する』 明治書院 1998年3月  
清水 知久 『アメリカの大衆文化』 明石書店 1992年2月

- 井上 宏 『笑いの研究』 フォー・ユー 1997年3月  
米川 明彦 『現代若者ことば考』 丸善ライブラリー 1996年10月  
加藤 恭子 マーシャ・ロズマン 『ことばで探るアメリカ』 ジャパンタイムズ 1988年8月  
金原 瑞人 『大人になれないままに成熟するために』 洋泉社 2004年10月  
中里 至正 松井 洋 『日本の若者の弱点』 毎日新聞社 1999年4月  
内田 樹 『死と身体 コミュニケーションの磁場』 医学書院 2004年10月  
庭田 茂吉 『ミニマ・フィロソフィア』 萌書房 2002年4月  
森下 伸也 『もっと笑うためのユーモア学入門』 新曜社 2003年4月  
鷺田 清一 『「聴く」ことの力』 TBSブリタニカ 1999年7月  
富田 英典・藤村 正之 編 『みんなぼっちの世界』 恒星社厚生閣 1999年5月  
香山 リカ 『若者の法則』 岩波新書 2002年4月  
FUKUSHI's Web Page 「20世紀の流行語」 <http://www001.upp.so-net.ne.jp/fukushi/year/words.html>

この研究ノートは、猪狩誠也教授退任記念論文の佳作である。

